

今月号の特集は壊疽性膿皮症です。壊疽性膿皮症はBrunstingらが1930年に報告したのが始まりとされ、発症率はおおよそ1年で3人/100万人と比較的まれな疾患です。診断は結構難しく、辺縁が軽度隆起し遠心性に拡大し膿疱を伴うなど典型的な所見を伴うものは比較的診断が容易であるものの、非典型的なものは診断が難しく見慣れることが必要ですが、私の皮膚科40年のキャリアを思い起こしても壊疽性膿皮症に遭遇したのは20例にも満たない気がします。病理組織像にもこれといった特徴的決め手がないことも診断を難しくしています。発症部位は下腿が比較的多いとされていますが、どの部位にも生じ得ます。30年近く前に泌尿器科から陰茎の難治性潰瘍を紹介され、皮膚生検を行っても診断がつかず、Behçet病でもないし、何なんだろうと思いつつ引かざる引かざる1年余り、ひょんなことから壊疽性膿皮症が思い当たり診断にこぎつけたケースを思い出します。シクロスポリンが使えずステロイドの長期投与で骨粗鬆症、圧迫骨折の副作用のマネジメントに苦労しました。つい最近も乳房手術後に発症した壊疽性膿皮症を経験しましたが、初めは術後の縫合不全、二次感染と見間違いがちです。

日本皮膚科学会から2022年に壊疽性膿皮症診療の手引きが公開されていますが、治療をみてみると推奨度Aのものはステロイド内服、シクロスポリン内服、TNF- α 阻害薬となっています。PMDAの医療用医薬品の添付文書情報サイトで壊疽性膿皮症に保険適用のある薬剤を検索するとヒットするのはアダリムマブのみで、日本皮膚科学会からも2021年に壊疽性膿皮症におけるアダリムマブの使用手引きが公開されています。一方、同サイトで壊疽性膿皮症を副作用として検索してみるとIL-17阻害薬や抗悪性腫瘍薬であるキナーゼ阻害薬がヒットしてきます。乾癬治療薬のうち壊疽性膿皮症に治療薬として使えるものと副作用として注意すべきものがあるのはなぜなんだろう、病態生理の複雑性を感じます。

壊疽性膿皮症のような遭遇する機会の少ない疾患をどう習得すればよいかですが、実際に経験した場合はその際にしっかり調べて自分のものとしておくことが大事です。鑑別対象となる疾患は多くありますが、これらはたくさん診ておくことで疾患のぶれ幅を会得することができます。また、時間のあるときに臨床写真をたくさん見ておくことをお勧めします。われわれが駆け出しのころはアトラスを良く眺めていたのですが、今はインターネットが発達して便利になりました。経験を積んでいくと未知との遭遇でも一発で診断できるようになります。

(五十嵐敦之)

— 顧 問 —

大原 國章 大塚 藤男

— 編集委員 —

土田 哲也 五十嵐敦之 相馬 良直 林 伸和 佐伯 秀久

「皮膚科の臨床」第66巻 第12号 11月増大号

2024年11月1日発行（毎月1回1日発行）
定価 5,060 円（本体 4,600 円＋税 10%）

年間購読料金
定価 50,160 円（本体 45,600 円＋税 10%）
〔年間13冊（臨時増刊号、増大号を含む）の誌代〕
〔年間予約購読者に限り送料無料〕

発行所 金原出版株式会社

発行者 福村 直樹
〒113-0034 東京都文京区湯島 2-31-14
TEL 03(3811) 7165〔編集室直通〕
TEL 03(3811) 7184〔営業部直通〕
FAX 03(3813) 0288

ホームページ www.kanehara-shuppan.co.jp

振替口座 00130-1-191269

印刷所 三報社印刷株式会社 TEL 03(3637)0005
広告申込先 (株)文京メディカル TEL 03(3817)8036

- ・本誌に掲載する著作物の複製権、翻訳・翻案権、上映権、譲渡権、公衆送信権（送信可能化権を含む）、貸与権、二次的著作物への利用に関する原著作者の権利は、金原出版株式会社が保有します。

・**JCOPY**＜出版者著作権管理機構 委託出版物＞

本誌の無断複製は著作権法上での例外を除き禁じられています。複製される場合は、そのつど事前に、出版者著作権管理機構（TEL：03-5244-5088、FAX：03-5244-5089、E-mail：info@jcopy.or.jp）の許諾を得てください。